

“This girl is always scribbling” —— Pamela の書く行為

丸 川 桂 子

（ 1 ）

Pamela を読んで強く印象づけられるのは、*Pamela* が手紙を書く熱心さである。書簡体小説が成立するためには、当然、手紙を書くのが好きな人物たちにせさせと書いてもらわねばならない、18世紀の手紙文学の隆盛には、当時の人びとにとって手紙書きが人生における重要な仕事のひとつになっていた、という背景がある。前世紀後半に郵便サービスが制度化されて、急速に便利になり、人びとは、ビジネスのためばかりではなく、付き合いのための手紙も頻繁にやりとりするようになった。とくに、中産階級の暇のある女性たちにとっては、手紙は、今日の女性たちにとっての電話のように、おしゃべりの重要な道具になっていた⁽¹⁾。だから *Pamela* の熱心さは驚くにあたらない、ともいえる。しかし、このような背景を考慮に入れても、*Pamela* は、手紙を書くことの意義、効力に格別にこだわっているように思う。作者 Richardson には、書きことばの持つ力に対する信頼、いいかえれば、書きことばは自分の意思・感情を表明し、人を説得し動かすことができるという確信があって、その確信が *Pamela* という作品として現われた、と言えるのではないだろうか。

ところで、言語学の一領域である pragmatics（語用論）は、utterance（発話）が状況においてどのような意味を持つか、を研究する⁽²⁾が、そこでは、発話を、それによって何かをなす一種の行為とみなし、一つの speech act（発話行為）には三つの側面があると考え。すなわち、（1）locutionary aspect：これは、ことばを（文法規則に従って）発することである。たとえば、部屋に入って来た人が「きょうは暑いですね」と言うとする。これが locution である。（2）illocutionary aspect：そのことばを

使って別の行為をすること。上の「……暑いですね」をあいさつとして言っているのならば、話し手は greeting という illocution をそのことばによって行なっているのだし、クーラーを入れてほしいという suggestion の場合もある。(3) perlocutionary aspect: ことばを使って聞き手に効果を及ぼすこと。先ほどのセンテンスをあいさつにを使って聞き手の緊張を解いた、あるいは、クーラーを入れてもらった、とすれば、それが perlocution である。一つの speech act を行うことは、少なくとも二つの(perlocution が起こらないこともあり得る) ことをすることになる⁽³⁾。以上の用語を使って、*Pamela* の手紙に関して前節の後半で述べたことを言いなおしてみると、「*Pamela* の手紙のそれぞれは書きことばによる speech act であり、それぞれにその手紙を書く意図という illocution があり⁽⁴⁾、また、かならず、perlocution を伴う」ということになる。

Speech act があればその効果がかならずあるとは限らない。「暑いですね」と言っても無視されることがあるし、手紙が届かない場合もある。過去を告白する Tess の手紙が敷物の下に入ってしまった、Angel に読んでもらえなかった、というのは後者の一例である。Perlocution を伴わない speech acts をテーマにしたと言ってよいのが、Samuel Beckett の戯曲、*Waiting for Godot* (1955) で、二人の浮浪者が初めから終わりまでしゃべり続けているのだが、彼らの会話は、会話といえないほどすれ違いが多く、彼らの speech acts のほとんどは宙に消え、幕が閉じるときも、二人はあい変わらず所在なく Godot を待っているだけである⁽⁵⁾。また、いくつかの nouveaux romans では、書くこと自体が問題にされるが、そこでは自動的にペンが動いて物を描写する。書くことだけがあって、だれがだれに向かって、ということは問題にならない⁽⁶⁾。したがって、illocution も perlocution も考えにくい。このように、現代文学には、ことばが聞き手に及ぼす力を疑問に付すような作品が少なくない。また、現代文学に限らず、perlocution が生じて、それは誤解だったという例は数多いだろう。

しかし、18 世紀前半、理性の時代に生きた Richardson は、ことばの建設的な力を信じていた。人間の心のなかでは、さまざまな情念と理性が常

に戦っているが、理性に働きかけて情念を抑えさせ、心を正しい方に導くのが、ことばである。彼は彼のことばによって、人びと、とくに、教育を受ける機会の少ない女性たちを教導しようとした⁽⁷⁾。年少のころから手紙書きが得意だった彼は、個人的な手紙でそれを試みる一方、知識の伝播に努めてきた印刷業の伝統に連なる者の一人として、当然ながら、その種の手紙を公けにして、より広汎な人びとの考え方に影響を与えようとする⁽⁸⁾。その試みが *Familiar Letters* (1741) であり、そこから *Pamela* が生れたのは周知の通りである。

Pamela の手紙は speech acts であるが、それが行われる状況 (discourse situation) を見てみると、それは二つの discourse levels で行われていることに気づく⁽⁹⁾。*Pamela* が両親に書き送る、あるいは、送ることができずに書き溜める手紙は、自身の上に起こること、人びととの会話、両親以外の人びととやりとりした手紙などすべてひっくるめて報告するものであるから、narrator としての discourse level に属している。一方、そこに写しとられている手紙は、人びととの会話と同じく、character としての discourse level に属する。もっとも、書簡体小説は、この二つのレベルが完全に分れず、しばしばまざり合うのが特徴で⁽¹⁰⁾、*Pamela* もその例に洩れないのだが。*Pamela* の書きことばによる speech acts は、どちらの level においても、有効な perlocution を持つ。*Pamela* は、その副題 *Virtue Rewarded* を *Writing Rewarded* と変えてもよいくらいだ。

手紙の大部分は *Pamela* によるものであるから、小論では、*Pamela* の書きことばによる speech acts を中心に、書きことばの有効性が作品の中にどのように表わされているのかを見て行く。そうすることによって、この書簡体小説の構造も見えてくるだろう。必要に応じて、speech act theory の用語を援用する。

なお、*Pamela* は、よく書くばかりではなく、よくしゃべる娘でもあるから、彼女の話しことばについて調べることも必要だが、それは別の機会にゆずる。

Pamela は、奉公に出ている少女が両親に近況を報告する手紙を、編者と自称する implied author が、補足説明や注をつけて編集した形をとっている。読者はそれを覗き読みさせてもらい、そこに少女の運命の変化を読みとり、その身の上を案じながらも、一方では、暇を惜しんでペンを持つ彼女の熱心さに感じ入る。彼女は手紙書きに命をかけていると言っても言いすぎでなく、Lincolnshire の邸から逃亡を企てたときも、ほとんど着のみ着のままなのに、紙とペンとインクは忘れない。Mr.B.の方は彼女の手紙書きが気にいらず、“This girl is always scribbling”⁽¹¹⁾ などと、くり返し文句を言う。

それほど熱心な手紙書きは、彼女にとってどのような意味があるのか。なぜこと細かに書き続けるかについて、彼女自身が Letter X X の冒頭に述べている。一つはもちろん、両親が自分の手紙を楽しみにしているからである。離れている親に詳しく近況を伝えるのは、孝行娘として当然のことである。narrating というのが、彼女の手紙の主要な speech act である。だからこそ、覗き読みする読者が彼女の身の上の物語を知るのだが、他に、彼女自身のための理由がある。

...and as it may be some little pleasure to me, perhaps, to read them myself, when I am come to you, to remind me of what I have gone through, and how great God's goodness has been to me (which I hope, will further strengthen my good resolutions, that I may not hereafter, from my bad conduct, have reason to condemn myself from my own hand as it were). (I. 39)

いかにもピューリタンらしい理由である。彼らは日記や自叙伝に自分の行ないを詳細に書き記し、そこに神の摂理（あるいは断罪）を見ようとした。書き記すことは、自分がいかなる人間であるかを知る手段であった。

Pamela は、今、不安定な立場におかれ、いわば、identity の危機に直面している。仕えていた奥様が亡くなったので、失業して、貧しい親に負担をかけるのではと心配したが、幸い、Mr.B.が仕事を与えてくれた。やが

て、彼が変な素振りを見せ始めると、大地主と小間使の間には主従以外のいかなる関係も認めない Pamela は、すぐに暇を願い出る。やっと許されたものの、亡き夫人の愛顧で身分不相応な教育を受けたため、日雇労働者の父のもとに帰っても、役立てるかどうか心配だ。それでも、田舎娘の衣裳を整えて、むしろ明るく覚悟を決め、自らを規定したのだが、それがかえって、Mr.B.を魅惑してしまう。それやこれやの困惑を書き留めることで、Pamela は自己確認をしようとしているのだ。

この自己確認の切実さは、Lincolnshire の邸に幽閉されてから、いっそう強まる。Bedfordshire の邸では、主人にあてがわれた仕事があったのに、ここでは何も仕事がない。出すあてがないのに書き始めた日記風の手紙の中で、Pamela は、再三、自分には今書くよりほかにすることがないと嘆く。囲われて何もしないでいては、死んでもなるまいと思っている“kept mistress” 同然である。現に、彼女の監督を委された女中頭 Mrs. Jewkes は、彼女が主人の愛人になるものと決めこんでいる。前の邸と違って、ここでは召使いたちは彼女の敵であり、彼女は孤立無援、全く孤独である。Dussinger は、“...writing — to one prone to change character unconsciously — is a compulsive defense of the ‘self-same’ thinking being” と述べて、孤島に投げ出されて正気を失ないかけた Robinson Crusoe が、日記を書き始めてその mind を取り戻した例を挙げているが⁽¹²⁾、Pamela の場合も同じだ。彼女にとって、書くことは、今は唯一の仕事であり、囲われ者になることを拒否し、変らない mind, integrity を保つ道なのである。

Ruth Perry は、18 世紀前半の書簡体小説のパターンとして、互いに距てられ孤独な書き手たちが、結婚などによって孤独でなくなったとき、もはや書く必要がなくなり、小説は終る、と述べている⁽¹³⁾。しかし、Pamela は結婚後も書き続ける。その内容は、同じページで Perry が言っているように、以前の手紙とは違った、社会的広がりを持ったもので、Pamela が Mrs.B.としての高い地位にいかに適応していくかを述べている。これは彼女にとって、やはり切実な問題である。神の前には人間は平等と信じて

はいても、Mr.B.の厚意の前に自らの“unworthiness”を思わざるを得ない。気持ちが“grateful tranquility”(II. 130)に落ちつき、Mrs.B.としてのお目見えのさまざまな場面で適切に振舞って周囲に認められ、Bedfordshireの邸に戻って、亡き夫人のdressing roomを自分の部屋としたとき、彼女は名実ともに女主人となり、手紙書きをやめる。それまでは、やはり自己確認のために書くことが必要なのだ。

Pamelaを追いかけていたときのMr.B.は、彼女の手紙書きをしばしば咎めた。召使いとしての仕事をサボってけしからん、というのは口実で、彼が咎めたいのは書くことそれ自体である。彼はBedfordshireの邸の女中頭Mrs.JervisにPamelaに忠告をしてくれ、と言う。

...you may only advise her, as you are her friend, not to give herself too much licence upon the favours she meets with; and if she stays here, that she will not write the affairs of my family purely for an exercise to her pen, and her invention. I tell you she is a subtle, artful gipsy, and time will show it you. (I. 22)

「この邸に居るつもりなら、主人の愛顧があるからといっていい気になって自由勝手をするな」という前段の本意は、後段の「邸内のでき事をあれこれ勝手な解釈を加えて書くな」ということで、書くことは召使いの分を弁えない思い上り、と断じているのだ。Mr.B.がこう言ったのはPamelaの手紙を盗み読みしたあとのことで、その手紙には、彼が庭の四阿ではじめてPamelaに言い寄ったときのことが書いてある。彼にしてみれば、思いがけなく小娘に拒ねつけられ狼狽えたようすを読むのは不愉快だし、それ以上に、彼の行為を卑しくて紳士にふさわしくないとする批判が身に当たったことだろう。年端も行かぬ少女、しかも召使いの分際が、自由に判断し批判するmindを持っていることに脅威を感じ、油断ならぬ賢い娘ときめつける。

Mr.B.はPamelaを自分のものにしたい。彼女はいつも手紙を書き、近づくたびに胸元に隠す。後に、出せない手紙が溜ってしまったときは、隠し場所に困って、ペチコートの腰回りに縫い込んだ。どちらも、女性の

からだの象徴のような場所である。手紙が彼女の mind の表現であるとするれば、それをこのようなところに隠したというのは、彼女にとって mind と person (からだ) が密接に結びついていて、どちらも、侵されてはならない、大切な本質的なものである、ということを示す。だが、彼女は身を守るのと同じように必死に手紙を隠すし、Mr.B.は、彼女を追うのと同じ熱心さで彼女の手紙を追いかける⁽¹⁴⁾。手紙の盗み読みは、まさしく、“mind-rape”⁽¹⁵⁾ である。

邸内外の community では全権者ともいえる Mr.B. (彼は治安判事である) にとって、Pamela が、侵すことのできない領域を持っているのは、権威の侵害である。彼は Pamela に包囲網をかけて外側から締めつけ、やがて内部に食いこんで、彼女を mind と person とともに自分のものにするために、邸に幽閉して身体を自由を奪い、書くことを制限して mind の自由を奪って integrity を侵そう、と企てる。Pamela の方は、Mrs. Jewkes をごまかしても紙とペンとインクを確保して、書き続ける。書くことは、自由のため、自己を守るための戦いなのだ。

このようにして書き続けた手紙を、speech acts として考えると、どういふことになるだろうか。Perry は、書簡体小説の手紙の多くは、登場人物が直接行動をとれないときに書かれるもので、自分がおかれた困難な状況や自分自身についてあれこれ思い巡らし (reflect) はするが、状況を変える力を持たない、と述べているが⁽¹⁶⁾、Pamela の手紙も同様で、両親に行動を促すものではない。それらが届いていたときは、楽しませたり、安心させたり、心配させたり、というような perlocution を生じていたろうが、届けられなくなってからは、それらは聞き手のない speech acts になり、したがって、perlocution を持たない。しかし、この手紙の呼び掛けの形式にもかかわらず、これを日記だと考えれば、聞き手は彼女自身であって、⁽¹⁷⁾ 自己確認という reflective な perlocution が生じていると見ることができる。他に対しては無効でも、書き手にとっては有効な speech acts である。それにしても、Pamela の手紙は状況を変える力を持たない speech acts で、述べたように、もっぱら narrator level に属していて、物語の action

を構成していないように見える。ところが、それは、結局、状況を変える力を持つのだ。Narrator levelにとどまらず、character levelのspeech actsとしてperlocutionを生ずるのである。

話を少し戻すが、Pamelaは自己確認のために手紙を書き続ける一方、手紙によって身体的自由を得ようとする。小細工を弄して、Mr. Williamsと手紙で連絡をとり、裏門の鍵を手に入れる。Mr. Williamsへの何通かの手紙は、character levelでのspeech actsで、そのたびに、頼んだとおりにしてもらえたのだから、有効なspeech actsであった。しかし、結局、逃げられない。錠前がとり替えられてあり、しかたなく門を乗り越えようとして、頭と足に怪我をする。頭の怪我は象徴的だ。次つぎと小細工を考え出す自分の頭を、彼女は誇っていたのだから。彼女は、試練に耐えられずに“foolish contrivances” (I. 188)で切り抜けようとした、自分の弱さと思い上り“— the weekness and presumption, both in one, of [my] own mind” (I. 184) — に気づき、これからは神の意志に身を委ねようと思う。彼女の小賢しさは、同じように策略に富む権力者Mr. B.の包囲網を破れなかったが、彼女のmindの現われである手紙はMr. Bを動かすのだ。

(3)

Pamelaの両親あての手紙は、Mr. B.の改心に決定的な役割を果たす。予期しないperlocutionが生じたのである。あまりにも決定的だったため、改心が一挙になされたように見え、その不自然さがこの作品への批判やパロディを呼ぶことになったのだが、注意深く読めば、彼が、戸惑いながらも、Pamelaのvirtueを尊重し、真のgentlemanらしく振る舞う方向へ歩み出す気配を見せていたことがわかる。その歩みを大きく後押ししたのが、ばらの茂みの下に隠しておいた手紙の束である。これは、逃亡失敗後間もなくのことで、監視の眼をごまかして書いたこの手紙の束を、Mr. B.は“treasonable papers” (I. 249)として奪いとり、読み始める。ところが、手紙を読んで大いに感動し、彼女に負わせた苦しみを詫び、一生

かけても償いたいと言い出す。策略を極度に恐れる Pamela が、このことばを信用しなかったため、彼は怒って暇を出す。Pamela が去ったあと、続きの手紙——これは、ペチコートに縫い込んでおいたもので、より intimate な思いが込められた手紙、というべきだろう——を読んだ Mr. B. は、戻ってきてくれという手紙で彼女を追いかけて、彼女の方も、もう警戒も忘れて邸に馳せ戻る。あとは結婚まで一直線だ。後に、Bedfordshire の邸に戻った彼女は、執事の Longman に、私の現在の幸福は、あなたがくれたたくさんの紙とペンとインクのお蔭です、と礼を言う。

Pamela の手紙は、このように、宛先人以外の人に読まれて、大きな影響を与えることになった。彼女自身、はじめて手紙が盗まれたとき、犯人は Mr. B. と推定して、自分の手紙の与える効果を予測している。

...all the use he can make of it [=the stolen letter] will be, that he may be ashamed of *his* part; I not of *mine*: for he will see I was resolved to be virtuous, and gloried in the honesty of my poor parents. (I. 13)

その通り、Pamela の手紙の perlocution は、“getting Mr. B. to be ashamed of himself” と、“convincing him that Pamela is resolved to be virtuous” であった。このような perlocution が生じたのは、届けられない手紙を自己確認のために書く、という Pamela の reflective な行為の付随的結果である。彼女は、自分のした事、他の人びとの仕打ち、その時の自分の思いなどを、忠実に、鏡に映す (reflect) ように描き、書きながら、わが身についてあれこれ思い巡ら (reflect) し、変らない自分確かめる一方で、Mr. B. に我知らず心が傾いていく自分に驚く。手紙を読んだ Mr. B. は、virtue を守りたいという Pamela の真情を再確認するとともに、そこに、Pamela という鏡に映った自分 (reflection) を見、自分の行動の意味を悟る。同時に、それらの reflection が、非難（これも reflections: Richardson においては、この語は、この意味で使われることが多い）となって彼を責めもする。Dussinger が、“It is her fictive identity...that sways B. and conditions his perceptions of the ‘living’ person tem-

porally and spatially ‘there’”と言っている⁽¹⁸⁾ように、説得力を持ったのは、Mr. B.の接した現実より、むしろ、現実が忠実に映されたとき、つまり、描かれたとき、言いかえれば、読物になったときである。そういえば、Mr. B.は盗み読みのはじめから、Pamela の “saucy reflections” (I, 251) にひるんだり怒ったりしながら、読むのを楽しんでもいる。Pamela の手紙は、彼には、「面白くてためになる」読物なのだ。

Mr. B.は、Pamela の手紙の本来の受け手ではなく、割り込んで覗き見をしている。これは、この小説の読者と同じ立場である。物語の中で、Pamela の手紙のほとんどを最初に読むのは Mr. B.であるが、彼は最初の読者であると同時に、Pamela の読者代表でもある。Character level に降りて来た implied reader といってよい。その Mr. B.に Pamela の手紙が大きな感化を与えるのは、小説 *Pamela* の、読者に及ぼす効果の先どりである。Richardson は、日常市井の事件をとりあつかった realistic な小説——そこには、Mr. B.が Pamela や自分自身の姿が映し出されているのを見たように、読者自身の世界が描かれている——の教育的効果への信頼を、Mr. B.の改心のドラマとして見せたのである。

手紙の説得力は、Mr. B.の場合にだけ示されているのではない。Mr. B.の結婚をどうしても許せないと荒れていた Lady Davers は、Mr. B.の硬軟を使い分けた巧みな説得と、申し分のない Pamela の挙措・物言いに、態度を軟化させたが、弟の結婚を心から受け入れることができるように、Pamela の手紙を読ませてくれと言う。その結果、夫人が Pamela の強力な味方になったことは、続篇で示される。続篇では、他にも、手紙を回し読みにした人たち (*Pamela* を巡回文庫で読む読者たちの代表!)⁽¹⁹⁾ が感化を受けたことが述べてあるが、Mr. B.の場合と違って、ドラマにはなっていない。

(4)

Mr. B.が覗き見した手紙は思いがけない perlocution を持ったが、Pamela の手紙の中に書き写されているいくつかの手紙、つまり，charac-

ter level の speech acts としての手紙, によっても, 書くこと, 書かれた物の有効性が示されている。Ball は, *Pamela* の中のさまざまの手紙が, その narrative structure を支えるために多種多様の役割を果たしていることを指摘しているが⁽²⁰⁾, ここで注目したいのは, 多くの手紙が, story の kernels (核) となる重要な events⁽²¹⁾ となっていることである。Mr. B. が手紙の束を読んだことは, 最も大きな kernel ではあるが, 一通一通の手紙が kernel になっている例としては, 先にふれた, Mr. Williams の助力を求める Pamela の数通の手紙, Mr. B. から Pamela あてに, 愛人にするに当たっての条件を挙げた手紙, 今晚は外泊の予定と Mrs. Jewkes に書き送り, わざと Pamela に読ませて油断させた Mr. B. の手紙, Mr. B. は偽の結婚式を企んでいると告げる匿名の警告の手紙, 帰途にある Pamela に戻ってくれと訴える Mr. B. の手紙等があげられる。これらの手紙は, 読み手がそれを信じるか信じないか, 説得されるかされないかによって story-line が変わってくるような kernels をなしているのだが, 愛人にする条件を示した手紙以外は, 全部, 予期した効果をあげている。警告という illocution の手紙は警戒という perlocution を生じるし, 戻ってくれという手紙で, Pamela は直ちに戻るのだ。手紙は話しことばよりも説得力を持つ。すでに十分に改悛したようすで優しく振舞う Mr. B. のことばに感動していながら, 警告の手紙の影響で, Pamela は彼のことばを信じ切れない。しかし, 追いかけて来た手紙の誠実さは信じる。Pamela の手紙の束の場合も, Mr. B. は, 目の前の, 言い抜けのうまい Pamela に不信を禁じ得ないが, 手紙は真実だ, と思うのだ。面と向っては相手を信じ切れない二人の間に文通が成り立ったとき, はじめて二人は理解し合い, 結婚できるのである⁽²²⁾。一方, 愛人にする条件を書いた手紙に説得されなかったのは, Mr. B. が日ごろ, お前を “honorable” に扱いたいと口にしているが, その手紙で, 実は彼が何を意図しているか, はっきりわかったからである。どの場合も, その裏には, 書かれた物は真実を伝える, という信念がある。

以上、*Pamela* において Richardson が、書くことの意義・有効性を、作品の構造にも関わるものとして表わしているようすを見てきた。*Pamela* の手紙書きは、読者にとっては narration の役を果たしているが、彼女自身にとっては自己を守り、確認するための戦いである。作者は、書かれた物がいかに人の心を動かすかを、Mr. B. の改心のドラマとして表現し、realism 小説の持ち得る力を先どりして見せた。同時に、いくつかの手紙を story の kernels とすることでも、書くことの実効性を示した。

Familiar Letters にとり組んだのと同じ、書きことばへの単純な信頼をもって、*Pamela* を出版したが、読者は必ずしも、理想的な読者 Mr. B. のように反応してくれない。読者の反響には、誤解に基づくと思われるものも少なくない。私信等によって正しい読みを導こうと奮闘したが、パロディや「続き」と称するものがつぎつぎと現われて応じきれなくなり、自ら「続き」を書くことにする。それは、*Pamela* の教訓の屋上に屋を重ねるような本で、*Pamela* は主として教訓のために書き、その手紙はほとんどこの小説の構造と関わらない。しかし、この小説ともいえない作品の中で発見した手法や問題を、作者は、後の作品で発展させることになる⁽²³⁾。次の作品 *Clarissa* においては、手紙は、再び、小説の構造と深くしかも複雑に関わるものとなるが、むしろマイナスの力を持つものとしては扱われるだろう⁽²⁴⁾。

Mr. B. が読者代表ならば、*Pamela* は作者代表である。彼女が身辺のでき事や人びとについて書くことによって、それらは意味をもった全体として形を成していく。書かれたものは、やがて、彼女の手を離れ、読者のものとなる。小説の中に作者と読者を滑り込ませるのは、ヨーロッパ最初の近代小説 *Don Quixote* に始まり、*Tristram Shandy* を経て、20 世紀の小説でまた採用された手法である。もちろん、書簡体小説は、書く人と読む人が不可欠で、書くことと読むことに多かれ少なかれ意識的になるのはあたりまえで、20 世紀の実験的な小説と同列におくことはできないが、単純素

朴な *Pamela* に、小説の古くて新しい手法に通ずるところがあるのは、おもしろいことだと思う。

Notes

1. 18 世紀手紙文学の背景については、Ruth Perry, *Women, Letters, and the Novel* (New York: AMS press, 1980), pp. 63–65, および、Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding* (London: Chatto & Windus, 1967), p. 189.
2. Geoffrey N. Leech, *Principles of Pragmatics* (London and New York: Longman, 1983), p. x.
3. Speech acts の説明は、Leech (1983), p.199 と Seymour Chatman, *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (New York: Cornell Univ. Press, 1978), pp.161–62 を参考にした。
4. 手紙は通常多くのセンテンスから成っており、それぞれのセンテンスが一つの speech act を行うから、一通の手紙は、多くの、時にはたがいに矛盾するような、speech acts を行っている。しかし、いわゆる「手紙文例集」に、「依頼の手紙」、「謝礼の手紙」、「お悔みの手紙」などの項目があることからわかる通り、一通の手紙は、全体として一つの speech act をしていると考えてもよい。小論では、主として後者の見方を採る。
5. Roger Fowler, *Linguistic Criticism* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1986), pp. 116–18 が、この作品の空虚な speech acts の分析を行っている。
6. Chatman, p. 169.
7. Jocelyn Harris, *Samuel Richardson* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1987), pp. 3–4.
8. Margaret A. Doody, "Saying 'No', Saying 'Yes': The Novels of Samuel Richardson," in *The First English Novelists: Essays in Understanding*, ed. J. M. Armistead, (Knoxville: Univ. of Tennessee Press, 1985) pp. 72–73.
9. Discourse situation については、Geoffrey N. Leech & Michael H. Short, *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* (London and New York: Longman, 1981), pp. 257–72.
10. *Ibid.*, p. 270.
11. テキストは *The Novels of Samuel Richardson*, 19 vols. (1902; rpt., New York: AMS Press, 1970), vols., I, II を使用した。引用のあとの数字は、巻数とページを表わす。
12. John A. Dussinger, *The Discourse of the Mind in Eighteenth-Century Fiction* (The Hague: Mouton, 1974), pp. 17–18.
13. Perry, p. 116.
14. Harris, p. 9.

15. Perry, p. 130.
16. *Ibid.*, p. 106.
17. Chatman, p. 172.
18. Dussinger, p. 66.
19. Kinkead-Weekes がこのことに関して、次のように述べている。“Pamela’s pen is the agent of a community which is created by reading within the book, and which images the creation of a community of readers outside.” Mark Kinkead-Weekes, *Samuel Richardson: Dramatic Novelist* (London: Methuen, 1973), p. 459.
20. Donald L. Ball, *Samuel Richardson’s Theory of Fiction* (The Hague: Mouton, 1971), pp. 149 – 50.
21. 物語の中の events (でき事) には、筋の上で欠くことのできないでき事と、そうでないものがある。Chatman は、前者を kernels, 後者を satellites と名付けている。Chatman, pp. 32, 53 – 55.
22. Roy Roussel, *The Conversation of the Sexes: Seduction and Equality in Selected 17th and 18th Century Texts* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1986), p. 83.
23. *Pamela* 続編については、丸川桂子, 「*Pamela* II (『パミラ続編』) の意義」(1987 年, 『札幌大学教養部紀要』30 号) 参照。
24. 例えば, Clarissa の不幸の原因は, Lovelace との秘密の文通にあった。また, 閉じこめられた Clarissa が家族あてに次々に出す訴えの手紙は何ら効を奏さず, ますます彼女を苦しい立場に追いやる。その一方では, 「読まれなかった手紙」, 「偽りの手紙」が, 彼女の運命を左右する, という皮肉も生じている。